

山口県内の飼猫からのバルトネラ属菌の分離と 分離株の分子疫学的解析

富田正章, 矢端順子, 富永 潔, 松村健道

日本獣医師会雑誌, 57, 663~666, 2004

山口県内の飼猫の血液中におけるバルトネラ属菌の保菌状況を調査したところ, その15.8%(6/38)からバルトネラ属菌が分離された. 菌が分離された6頭の内, 4頭は *Bartonella henselae*, 1頭は *B. clarridgeiae*, また1頭は *B. henselae*と *B. clarridgeiae*の2菌種に混合感染していた. 分離された *B. henselae*の5株の16S rRNA遺伝子型はす

べて1型であった. また, 流行する菌株の遺伝子型をパルスフィールドゲル電気泳動法により解析したところ, *B. clarridgeiae*の2株の遺伝子型は同じであったが, *B. henselae*においては多様な遺伝子型の菌が流行していることが明らかとなった.

In Vitro Bactericidal Activity of Antimicrobial Agents against Enterohaemorrhagic *Escherichia coli*

Shigeharu OIE, Junko ISHITOBI, Akihiro SAWA, Masaaki TOMITA, Akira KAMIYA

J Antimicrob Chemother., 54, 897~903, 2004

腸管出血性大腸菌9株 (血清型0157 4株, 026 2株, 0111 2株, 0165 1株) に対する抗生物質の殺菌効果について検討した. Norfloxacinは10mg/lで9株に対して殺菌的に作用したが, cefoperazone, kanamycin, fosfomycinはいずれの株に対しても殺菌的效果は認められなかった.

特に, fosfomycinとkanamycinの10mg/lでは試験菌株のうち4株に増殖が認められた. これらの結果から, 腸管出血性大腸菌感染症の治療に用いる抗生物質としてnorfloxacinの有効性が示唆された.